亜本金瓶梅

特
入 13
969
6

門 逸3
號 969
卷 6

繪本金花談巻之六

目録

才原動解岩城小決誌の狂式説事
才原岩城に密計式説図
岩城兵庫菅野小助と偽る事
爰野小助蘭と変て竊入図
其二
松至的之助菅野小助式教事

同圖

的之助雷を夜ふ天怪を退る圖

其二

松並的之助玉を羅る事

護明院壇氏を摯く加持とる圖

岩城才原隠斗的之助氏隠さんとする事

岩城的之助ゲ不義と罵圖

才原勘解由岩城を変誅の理氏説事

時運尭季ふ望ことなれども月月地ふ落ち忠臣の精神天ふ通るふやう

芸夏の謀斗ちどころふ漢者的之助ゲるよふ人寄され大湯温泉ゲ後

才原ゲ氏ふ雖りて亡びゲ〻も身ふ笑くるに其盗人七十余人漂後の

うどゲひと多ゲ中原安の軍獄ふ押こめらまゝぞ是非もなく天来

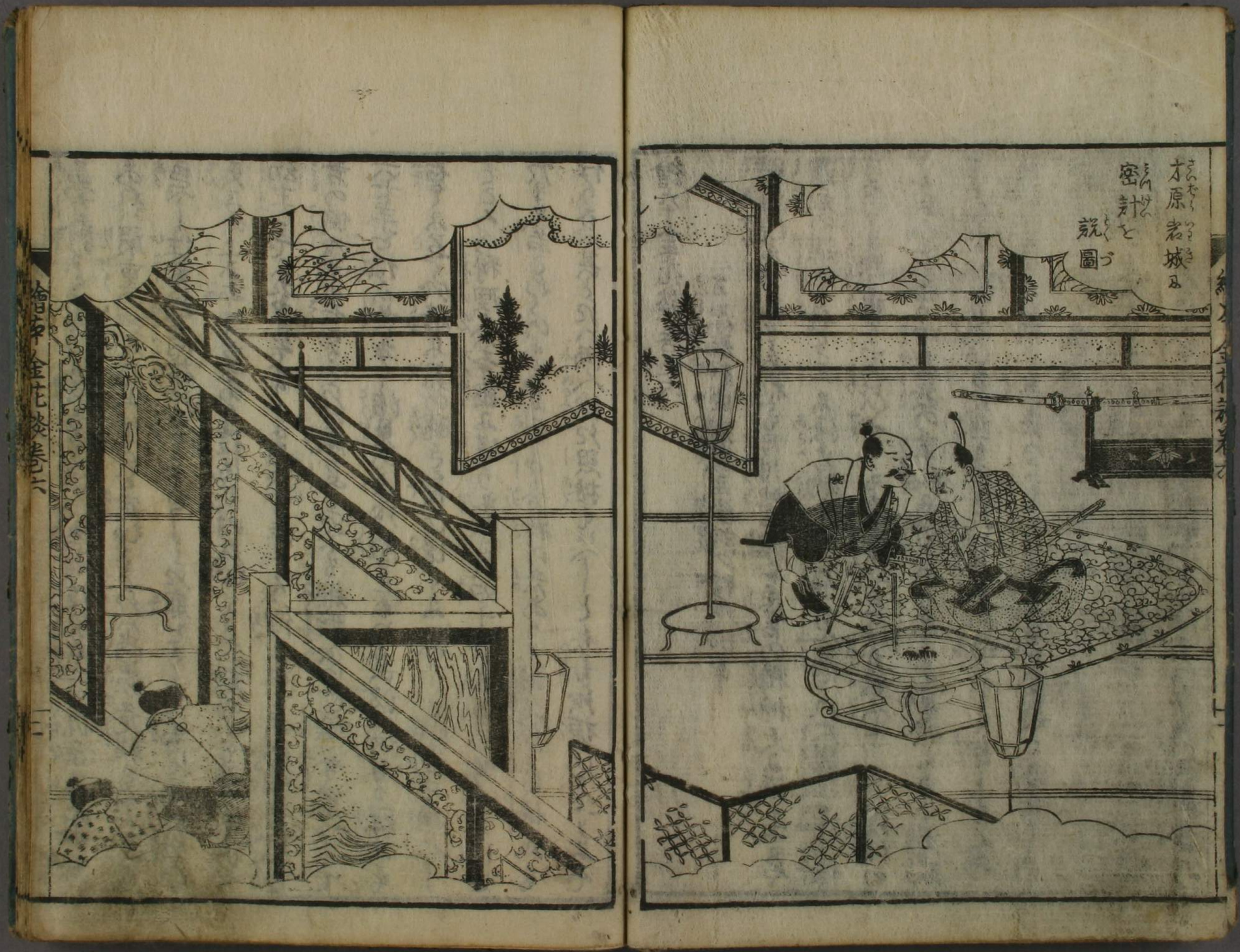
才原奸曲邪智比びる氏曲りのるれが其夜の作さゝく少しも人乃

疑ひ氏多ゲ所ゲく其夜ハこゝくゝ上原安ふあゲく夜氏あゲ

伊勢守安貞も母ふ月ふ乃んで私事ふ伊勢守の

家ふ立ゲ人氏をさゲ安貞ふ問人暁の時冥全く兵庫君ゲ有怪

不審こて存じまゲべこて氏歳里ふ泊ゲ仕りるべ兵庫君乃


太原君城ヲ
密計を
説図ス

而古文書にもいろ〳〵さまざまに人の当時権勢者の桃原家に由緒
あれば最重の礼物にてありつてゆを定むることに成り当家危胎に及ぶべ
きもべし往昔越高橋氏なるものと世に廉をさして馬上時の勢ひ
天下の上に出でうる古あり権臣其時代なるゆへ悪めども及ざるりの
幼主までに九才にてまし〳〵ませば今年より僅に六七年の間なり忠臣
君の側にて去ざるとれば悪臣とゆへども補略なれば唯愛のみにして
六七年を待ぬ内に後見の氏離きゆへ其後は何なる謀計も
悪〳〵みにて諸に家の魂を寄ひ傾すゆへ〳〵と成度石摘れし
ところの料理人なる国に送り来られ双十郎常刀の吟味を任せ
たまへ若これ〳〵のうちに無るゆへ合薬の者ありて面えゆて白状にも
仕りなべ其とれ両人涼に思按もいべし〳〵と奏言に振ひ上りゆそ

仕物守もおうるべづたれとても其上首なり〳〵七十余人の罪人者なれ共
遂〳〵に無り為て仕物守ぶ〳〵も才原に結ひ申に成れ其文系を撰
世ゆひびる〳〵仕物守のこゆへ同役の人も渠に結ひ申りの一人も
あうけ其後は京岩城兵庫の方ゆ〳〵互ひに顔に見あうせ
無支に談ひ且調義図ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵と悔とれば兵庫に申けるゆへ
すでゆ出て後の家のとれとれ波の仏に成れ皆時寄是のとひこ
若〳〵めり交千代が側ゆ〳〵忠臣のりの多くありてい〳〵度寄計に
用ゆ〳〵も中〳〵成物なりぐ〳〵に後いるるゆ後に用ゆ〳〵や文系ぐ
曰今より後は合ゆゆ毒と用ゆ〳〵るも容易ゆ合にすゆ〳〵けうと
思潮若ゆ撰〳〵るに用ひて森正思ひ入刺殺ゆ如〳〵兵庫
大江ゆ仰天〳〵それゆて某の面めりとゆの業力双十郎に成くゆめ

ことごとく推察すべし。大系寛永とうち矣ひ君すでゐ昨日の毒害
請人いまゞ君の子脈とゝ人ゐ系ゐ下と思ひゐ子脈昨日君ゐ伊勢ちを
計ゐ接弦ゐ上屋敷へ弦付ゐゐひし。公拉並酌之助をえトめ伊勢ちゐ
ゐるまで氏ゐ八丘庫頭屋の西りと仏付し。夏昭旨うゐとゝふゐ兵庫
いよく歌色変り結ゐとゝ八ゐ子ゐ身の禍ゐとひ迫ゐべ。いして後藤氏
脈ゐ八ゐ大系ゐ白ゐゐ。ゐ桑山の上ゐあゐと安心しゐ。ゐ某ホ伊達家の
侍医ゐ。も歌人。ゐゐあゐとゝ八ゐ国元の老医ども評定の上そゐ。まく
捕罪の捷ゐゐみゐく切腹をもゐ付旦八強死ゐもゐ。ゐ前ゐ
天下の請侯その上尚家の叔父君ゐれ主君同様ゐゐ。ゐ千代幼稚の
間ゐ帝後見ゐゐゐゐゐそれのゐゐ。ゐ時の捷柄氏振り威勢普天乃
下ゐ輝く桃原家の御猛威若国元の老医ども。ゐく活動ゐて。ゐ

家の頑癖とゐう長ゐり帳今昭白ゐる徳拙ゐゐも公明ゐ孤ひ出ゐる。
成ゐく省見安千代氏殺害しゐゐも雖ゐけゐ氏年ゐ支のゐゐ。ゐ
高氏絢ゐて斗車と白ゐ。ゐ往昔ゐゐ大ゐを存ゐゐ。ゐ人ゐ老ゐ氏
脱ゐく支我交もゐゐて。ゐ統住ゐ自逸成統せざゐ。ゐ時ゐ我首創ゐ前ゐ
ゐゐと右氏宮ゐれゐ大国氏堂ゐ。ゐすゐことゐ孤ゐゐ。ゐこれ而謂虎穴氏
捜ゐて虎ゐ子氏ゐゐとゐゐゐゐう大国とゐて後業氏ゐ孫ゐ。ゐこゐする
成統せゐゐて氏貴氏別ゐゐう死生存亡物ゐゐう変ゐてゐのちゐ。ゐ氏対ゐゐる
人ゐ勢ゐ偏ゐく老ゐゐゐゐゐ氏孺ゐゐゐて味ゐと活庭ゐ如ゐ宝珠ゐ
ゐゐゐ。ゐ君ゐく氏道ゐ氏見ゐり。ゐ人と支ゐるゐゐゐ。ゐ嗚呼才ゐゐ
人膽氏鱠ゐ。ゐ柳盗跖ゐ振ゐあゐ無庭氏大ゐ感。ゐ汝ゐ云ゐ雄論ゐ
系ゐ一変ゐゐ。ゐ人ゐ氏ゐゐ。ゐ氏対られゐく其日ゐ活ゐを立ゐゐ

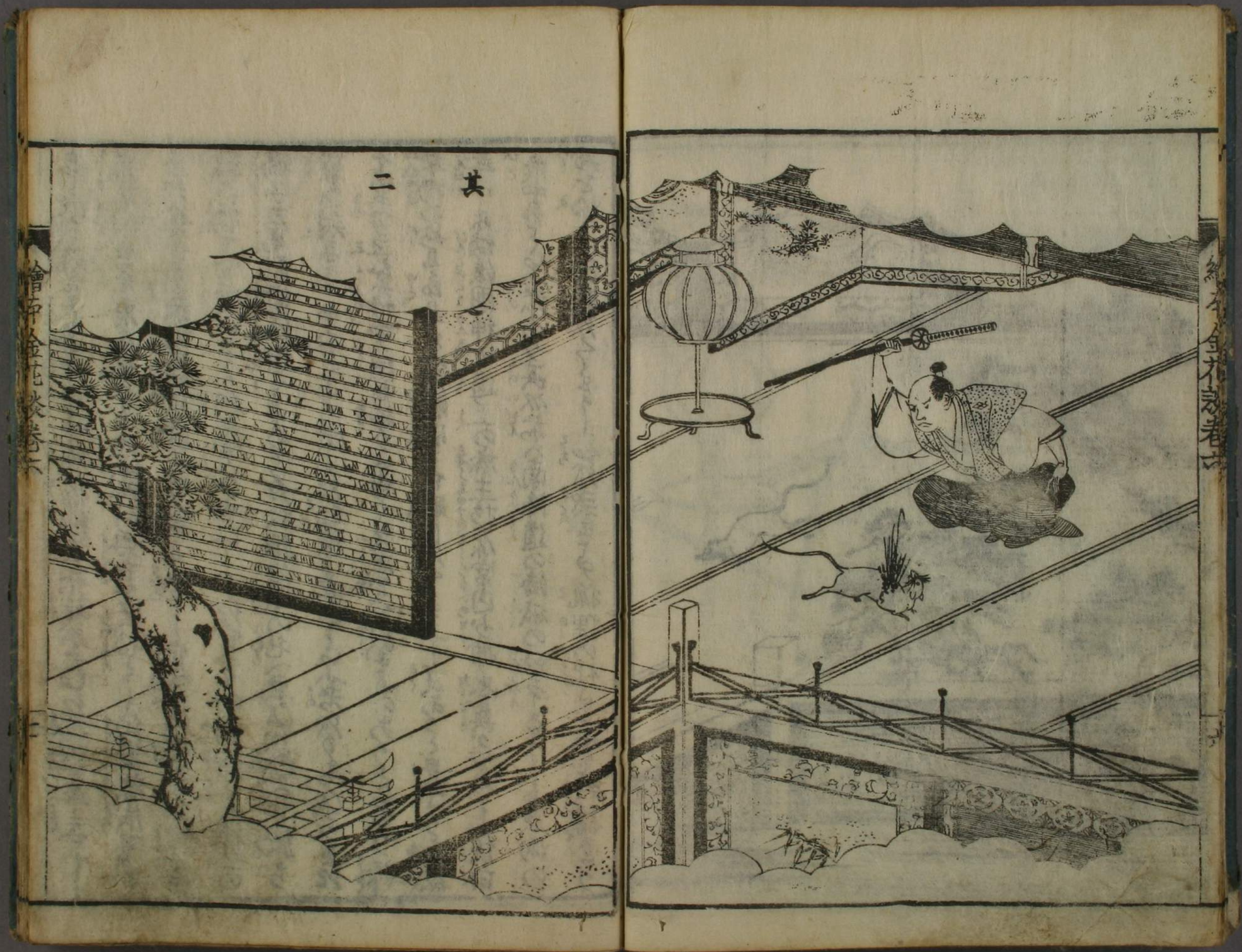
翌日千代の屋敷中に鎌倉在番の諸士評定のうへ甚所役七十余人
本国へ送らぬ議へし此事覚へるは雖に叶り本国に送らる眼合帯刀
片鳴双十郎両人のものにて厳敷糾問にあづかり責苦に苦しみを述る
者も多かりしかれども嘗て毒害の本人あらはれざる故へ因擬のうちに
とらへられ無実の罪に星霜を重ねるこそ便なけれ是によりて淺香
的之助は大きに心を用ひしかども毒害の本人明白にあらはれず所より
帯刀双十郎が目鑑にかなひし膳部役の者を撰び出し今に鎌倉に
ありし臺所の司どる者皆没々本国へ帰し是より井の水を汲入
よろづ大切に膳部を調進するといへども浅香は猶安からざるに思ひ
すべて御膳部向は大奥にて取上げるとやなく臺所よりの調進する
食事は一切無用に的之助が妹に於綾於次の両人の乳母なにか含めは

との人将来へ入る夜の用ひなるぞ奇特なり

岩塚兵庫菅野小助となる事

冥英荘再として将軍に及びたれば兵庫大原が室したる縁井ども
世にまず手に室しくして居たりたる荒井和助兵庫が前よ出生せ遂
よりもの妙にぬるものを捜し求むるに二人の忍術者を連ねりけ
めく伊賀国の生れ某と云ふ行るの友大膽なる生質にて方のさう役
にも相立べき程のものなり名は菅野小助とやい兵庫急にヤ系をも
運へ中から小助はしかるに寄度より小男にて頬現凶悪の三人
さて忍術の雑は試るに誠に自由自在の振舞ありて人の眼前を通ると
いへども人これは見とがむる事あらず形をさぬく変じ隠
形の術まずひの侭なり抑忍術の法我国へ傳へし事何の世より家

菅野小助
亀と戯て
窟ひ入図


其二
繪本金花談巻六
繪本金花談巻六

右の説は天文の年中伊豫掾純友朝廷に叛して九州を平定し
給ふ国司左宰府は筑紫の好古と云ふ人なり純友誅伐せらる
るに紙軍豊前国若松の浦と云ふ所に官軍防ぐ紙軍
戰ひ勝て官軍いさゝか利なきひゆへ官軍の副将軍に孫王の
嫡子左馬頭源満仲をしてこれを若松浦の紙の屯へ攻へしと云ふ
襲ひ討ふ事ぬかりなく是あり此とき初めて攻ひとる者なりしかは
その夫ゝ子孫伊豫国に住ゝ富家と弱きとあり之を掠
逃潮の如ふ走りて人民眠眠さを眼見て居ます事あり之を永禄
年中ふ伯後国神辺道上の城主杉原宮内少輔忠真と云ふ者佐田
長四郎と云ふ者あり其以前南海道の海賊の張本なりしを思ひの
ほかなく人の眼にかゝりまして如何なる狐狸の化るかも杳揚きり

燈中ふ新法を切くぶく殺人團圓としてとりひとまを見て居ます
居るふ少人のりくる新軍づ盜れなるふ法を知事ありとこれへ江
太郎左衛門と云ふ者あり力を中国ふ名ひろく佐田ふ向ひ是下ふものびろ
上をとりとりくも吾眼にかゝります事叶ひがたしもの刀以盜れるべ
ごへんの所ふ進ずべし佐田が曰旋と賜るべしや太郎が曰り兄付ふ
まりて撮殺してんと云ふ佐田が曰喪身失命せん事へ撮殺さるんも
切殺されたんも同じ為りさらば無びへ入をしく日以さ攻ふ焼ふんと
約束しとり入江太郎ふ家ふ向りて浦四面内外の戸以鎖りあり
居たりとり佐田入江が宿所ふ無びへ入く見るふ戸鎖りく家さりされ
と云ふ所と知ること無びの中なりて無るく内ふ無びへこれ
入江初の因ふまりこれもせどりり居ふ鎖りく勿睡と宿ふ塩んと

すまども揺ぐごとくしてとうくと寝入るうへとう
水沢一滴二滴耳の中へおとしければ入江弘忍扱い両像く板の間より洩
なるよし思ひ寄よ頭沢擡て耳沢傾けゆをねぐへ去うちゐ刀根巻
そろうと棄ぎくゆうるやくあうて見るゐ刀根巻うせくゑうたるゐそ
扱い方便をたうとえんぐをして居らうしとるう強るとえい母湖の極三ゐ
いううてい神変不例のことあうとこそ覚やめれ岳庫い小助沢ゆそ太さよ
ようこび金銀をあうへ孫沢さぐめ広ちゆゐ渠が家奴とさぐう見るゐ
大膳不敬ゆーて氣流左色くゆうめ捕るうも容易計畠沢白状
すべたうのとも見へぐう紀武うえ紀小助る大左沢的ーゆとそ女子代う居間へ
母びいう判殺ーてゆさせるべ世ぐう孫沢ゆち大孫をあうへべ一美ゆうよ
脱ま沢ゆうるい大左成能の浪千石以上ゐ取ちんと行せーうべ小助も欲ん

限りする紀兄母べ一ゆゐも及ぶぐ沢ぐひ必ゆ広沢者ーめゆうるうれっ亜
母湖の妙沢りゆく居間ゐ母びへりあくと数宮ーたへ的ゆ助沢者
いうわぐ歳ーくちるたゆーも知れざる換ゆ亜へゐ方沢りゆべーゆ自行
捌捕れ内膳とるうも君の五宮沢生沢ゆあるべうやゆめくゆ家者
あうべうーぐく固く楚妙沢宮め同年極月廿日の夜母びへべうそそ完
まりける

松並的ゆ助菅野小助沢敷沢亜

国家者ふーて忠臣弱うと宜うるゐ大膳左亜厳系友衛退隠ー
ゆうーー後幼宮女子代のうれゐあうう既ゐ奥臣其へ君沢対うーーうぐも
忠臣側ゐあうくゆ共討用る亜あうらず亜ゐ松並的ゆ助へ沢者うたくゆ
幼宮沢ちう宮夜沢を者ーー去年九月十六日すでゐ毒物の寄菱ゐて

のちハ孫ガ一も高うる く國えの老医より的〻助一人ハ夜ゑ〻と入ども
君の側ハ去るるく錦口より内の端書と兎さまを居間の次と的〻ガ
夜の諸和こさぐあひ助〻く守護しるされども自然意あんうと
淺香うゝびぬあんの乳母おあやあ門ぎと永〻合せ的〻助と共ハ
毎夜不寢の番とうゝ夜半ごろと兎め假で今晩寄用より夜ま
までハ淺香乳母と二人ゆく君ハ寄うう其間ハ的〻助休息夜ま
的〻助起くく的方までをうり二人ハ休息〻まゝ翌晩を寄ようう
的〻助ちう二更後より二女的〻をちう手ハ御の意うう既ハ
檜川廿日みそ松よりる代日ハ別て宅を来つく組風嚴〻く起りて
世上ちゝく雪降り今春ハ的〻助夜ま夜ようう的〻ハ代ちる夜ゆ
宵より涙の間の屏風の内ハ休息〻夜半の時半寢耳ハ宅ハ

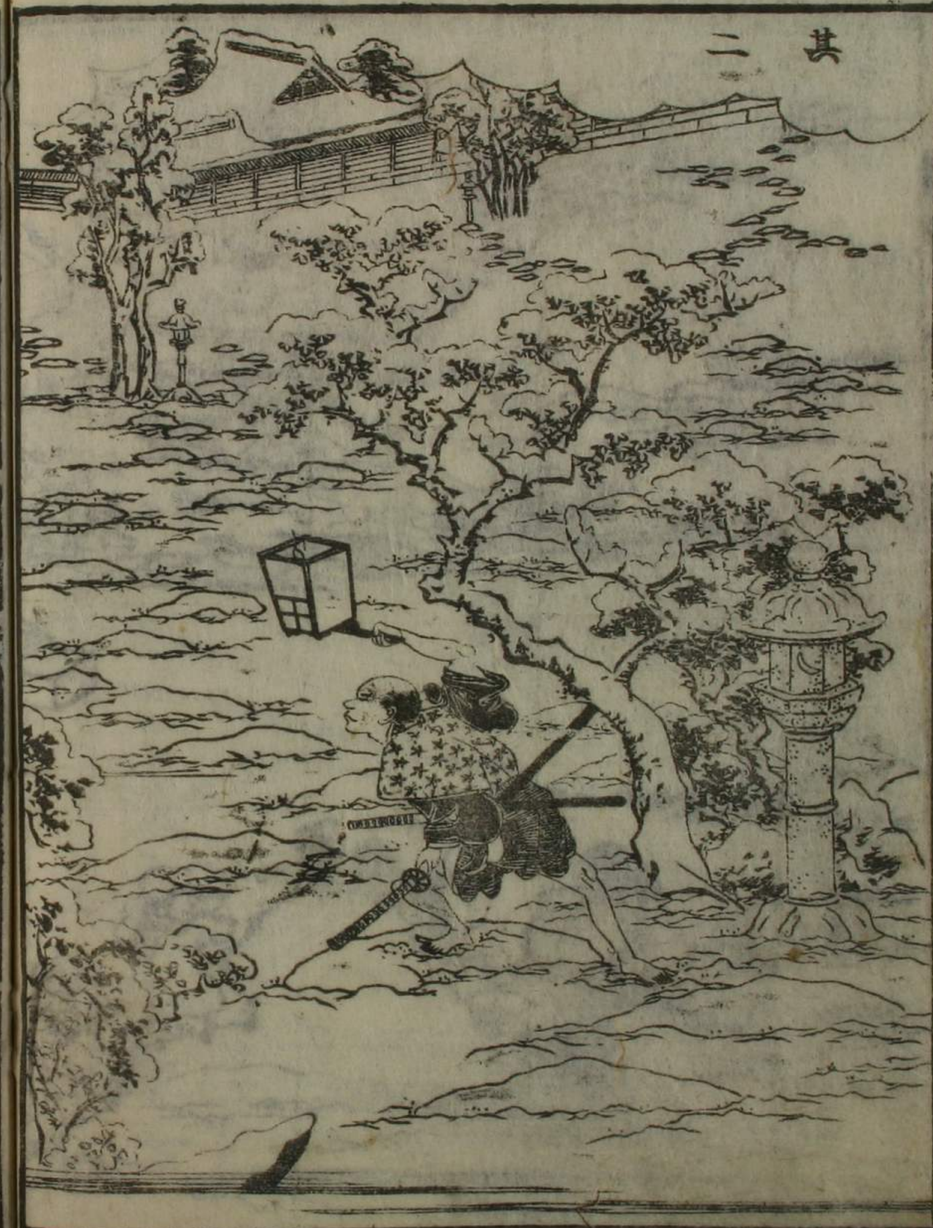
起上り手水の水沈碎ひく顔を洗ひ繕の紋結びるゝ奥ハ西ハ
つ〻ま梅お後夜お涙あきゝめて睡うるべ〻某今晩ハ切りハ熟睡
仕うぬいざ〻休息ろうべ〻と懇懃ハ申ける女ゝ〻も淺香乃局
御式ハ旅老並とあまべ〻ハ威儀を美ず淺を茶こそ繕ハの代配
さてハつれも有べ〻ハみ今ハ大たく休息あれば統ハをと言結男ハの
ごとくるれども何國ハ柔弱ろも愛あって強〻〻的〻助ハ曰
某ハ輩ハみ只ハ定く強ま門ハ拒だ代べ〻とそのまゝ二人ハ休息を
其ハ人くの寢ろハ待く食屏風を引廻し涙の間ハ歩御居間乃
只ハ寄ろ居る夜ハ次第〻く永ハ深こうすでハ四更ハ過〻て茶本も
寢入丑時就方ハ未明ひつゞけ居る折〻不忠義ろう今宵
茶壺

的之助
菅の
菅丞伝
切る
圖

きごとけるに勢めく両眼を開らんとする為に実に入ること如く其上
茶毋焼しかる焼火赫然として照らしこと勿ち冥々滅しとて心しく
情んとして的く助其焼火捨てんとするにあれども頻りに睡魔
ざれい吾身にしりぞくこと能を戒めるれ幸国に出て来りすでに五年
俄かにも忠孝をしかしの間くそなも睡魔信ぶに今者幼なりう
睡眠の発まるに身の労をてる故うたがしに忠誠の色まる四へ来やと
情に忙怠懈しに志を厳みし眼に見えしけば不思議るるふ
仏の法の儚み入来りたん書通りへおしく大なる嵐一足眼の間に
何ひしに指間にへらんとす的に助ぶ眼に瞭見えしく嵐に其後
迹をたり拭ひ消ぬ嵐の振舞る端くの入口嵐の入へに透もり
じ辺巻て嵐の往来たる夏るに見是的にるるもで嵐に為ら

蟻螻蛄の属とへども某う変化する眼前通ぶに渭見ること
うく思ひるぶに睡魔ふてび発りうるくと眼見に常なる眼差に為れ
縫の方と要み垂その隙とりしく額み押当狭乳のもやうあるに
借く睡りに為さんとまばらせども常るすみ眼つ〜へ全く忘れの
不ふるうりこのれ的に助ぶ再び眼るに考へ己前の大嵐影見出しく
眼に例まんとする透間に何ひ隙のあを通り奥にみへんとする間み
聖とへさる間勿ち的く助眼に引けば嵐へ繋るに逃んとする扇をて
却へにもやうけん額み常なる眼差の隙みて嵐の直中丁どう
うれく一段鳴平とつたまさ〜く嵐みへあるう的に助情法
うてなぐるに嵐をみ見ども嵐なるに引に見てす間もるく的に助が
後の方より真身真黒み色なる一人の大男みみ白みの短刀に抜け眼も

的之助
雪夜み
夫
怪
と
遇う
圖


其二

拳も一貫ふと的を助成寒毒の早足の手利ゐなたらと捲らう曲者の
後ふ知らう一あく歯て生捕んと捲ゆる服差れ乗ゆく脇中に
確とうの方ふ撃れ堪る公に曲者い白ふを振上ゆう一刀若しけふ
叫び紙に陰ふ例ゆうう出越ふ情ふ三人の女房一同ふ起ゆう中に
清書紙ふけ的を助反只今の越ふ的を助ゆ曰爰ハ格別幼者様ふハ
別条ござゐぬ死お後お決君い安く御寝ゆうてまゐくひ夫ハ寝ゆう
使ふ御帰ふ仏紙付られと服差流偏ゆ歯垂ゆる曲者を「発」
見ゆふ顔のうゆう血流を茶ふゆうて裏縫ゆう的く助扱く清ゆ方
是今く思測者と見ゆう彷ゆうの人を知ゆるハ生捕ふするゆ安ゆ
鼠と仏的緊しく撃ゆる放ゆ二度お殺せゆと能く見れば初めふ清と
ゆく歯ゆる不い但脈通ゆ天中ゆう髪陰紙ゆけく清の歯ゆ

皮肉傷れ骨肉砕血ゆ[illegible]を出ゆう左大夏の穴不ゆう後ふ歯ゆる
不い甲骨の下のゆ才五の骨の左ゆの方紙仏の命ふゆて夏も清の
歯ゆ不骨ゆけ皮肉ゆくゆう二ヶ不の急取清ふ力に往せく謀ゆ化
さふ歯ゆふより二言ゆいゆず死しくゆも捨ゆう流ゆも曲者の
死しゆる夏紙悔ゆされども的を助ゆ者の紙敬びけゆい人の知ゆる社
幸ひゆれ密ゆ死骸と我紙庵の内ゆる長持ふ入ゆ来ふい合先
人ゆれ知ゆ中ゆぐふ捨ゆうげゆる化神ふゆてゆ悪討紙白ゆし
たゆりの足拘思ハすゆと紙ハ自筆ゆ懲ふ三ヶ悪夏やむ通理ゆう
名今宵のゆハ法ゆしふて直しゆんゆけ是べ其後の内ゆ流書の
斗ひのごゆくふでゆしけゆる

松並的く助義雑事

勢く兵庫が家ゐ戈原勘解由まうて夜ぶかに定めく友千代が居間の
うさ騒動起らぬ事もあらんと伺ふ家ゐ何の変もなく小助が動止
いぶかりやと問ふ兵庫も不思議の顔に聾め家も今朝よりの小助が
便り紙何ども蹴蹴まれぎさてたこのりの流石妻子るたりのゆく一命
惜く成て出奔〜〜すると呼べ〜〜うり〜〜囲えへた事に註進ふせるば
家宝まの身のうへうと安に心もるうけう廿日ばうちく伺のとるく
屋敷中もそくとやるる云る夜御居間の方騒〜〜に成るせ〜〜ろハ
何ら曲者あらく御居間ふ忍ハ入〜を松垂的く助通るく曲報〜〜
後悔す迄ども及ばで密ふ淺書が下紙ふ付海中へ捨ろうるとさと
名れば兵庫も勘解由もこれに成てく安堵の坐ひとるるふうに後
さぬくふ陰に成とそるも淺香的く助用ふいるく急うるく

十計すでふ尋ねく思ひぬ九月ふいろうろ兵庫才系ふむひひ切く年
明に成る間ふ友千代ぬや十七に成るいろ若十五ふ成るを淺ふ
計略用ゆる事るひぐ〜〜家すでふ年齢六十ふ外ろいぐ存生乃
中ふ本家に奪ひ垂すべわぐ子を波るが世ふいるくる親ひぐる
ろべ〜いるる奇計に成ろさんや何ぞの乃友千代が側ふ淺書的の助
両人ぐるる成時ふ学に返ぞろるも大やく計略ハ潤ふべ〜才系も
うもうるつに菓一つの計を与ひ〜この両人と退るる陰に成とと
ぬそうふ耳に口紙ふ也計策をさく中に成れば兵庫ぬるぐよろつひ
ひ計ふ知るうとこれよろ才系ハ右兼沢井平ら恋を味的之助ら
多流の出奔一通ぬ〜〜沙ひる流ふ伺せく一通と渡めよ〜〜いふふ
平之丞すとろ偽筆の名人乃風逸勢の筆勢ふのぬも一たび

護明院壇法
義く
加持する
圖

見てはゝ〜もたゞはるゞ如く似せられば一家も及ばぬ似せんとや
いで斯く書文法を作り半ら恐み書世法書的之助を退く
計夏氏与已る始る水其年の冬雄をとる鈴の図水天怪出で
いよ浮流起り其統ようぐみて後水は何某が長家のうへ水たけ
一丈だうの傍法居る氏又たるりのあるこゝ例より毎日の夜乃
曉がと水和殿の屋根の上水傾牙血水ちたる女の幽霊出るる氏
何某ゲ又ようるどさ毎ぐ水やたる氏流れ出れ下女豆里みど既水
黄昏より後は戸外へ出る夏氏名れけり始る水十月十六日の夜
却ゝ家ようるる水友千代君に夏氏世よくの事ひければ
涙交こひ厳寒と厳さとゝども左右の人〳〵無據のこゝりひ僅水
雨戸氏押もゝれ出のけ〳〵と見せたる水波庭ことゝ〳〵白雪

積り諸木枝となる雲の絵間氏照月と雪のあるうへ人〳〵樹木の葉
を水れお物の注来する形あり的之助注く何ふ水そのさ海はさく
半のごく月のひゝり梢の新ようれ眼水映ず猿氏振る水異
るゝ氏友千代君もめぞや水又さく的之助あれ氏又すく水的之助
花石の上水濯くぐり抜りの中水ようけ入らんとするゝ氏大怪ハ月く
もるゝ　迷失ゝり勿ゝ氏先水ハ嵐と又ゝる異術老水今晩
うゝこ水天怪氏出〳〵家に遠〳〵室氏奪ひり〳〵庭の色りへ
刺客氏入君をえらんとする氏後あるもたるゝこと遂ようり引
返〳〵急水雨戸氏塞今晩の夏人〳〵法色水夏と固くはど先
とそ〳〵水ゝるこれ老家ゲ所為水ゝ易て天怪の風説氏活せ異の
者水云付這拓のりのと出せ〳〵後水法書的之助氏罪水陸入と

會稽金花談巻六
十二
岩城左原が
陪計
的之助を
稲さんと
そろひ
圖

するふるに六十六略と兵法をぞ学ひ知るる其い年経るく学ぶ事
の裏を極つゝ忠臣のともがらに月日をやく古幼君の為に成
待今年我齢十一歳十五とも今ふ世をやく月日の左はとと
頼つぬりのいろうろる今年春ふ月にても怪異の沙汰やまず二月
二十一日ふ宮拙兵庫に同役仰付る友員の方へ仕ふつて申へけるハ
近来伊ゝゝん上屋敷ふ怪沙汰ふ付申へ出た頼いあいぐ
明日上屋敷へ出あれとあるふ仰渡ひと通言ふ及ばず無
別て拙二百兵庫ハ友員に誘ゝ上屋敷ふ参り申ふ及ひ間ふ五鶴
の右老七郎ゝ去年家伝のとうく夫怪のさまあり殊ふ友千代の目
ふてゝも出ぬ出ぬゝ上ふ為ふ年ふ成ても今ふ取さまですべて古
屋敷ふく狐狸の変化ある変うたやく退けすべけいぐゝ

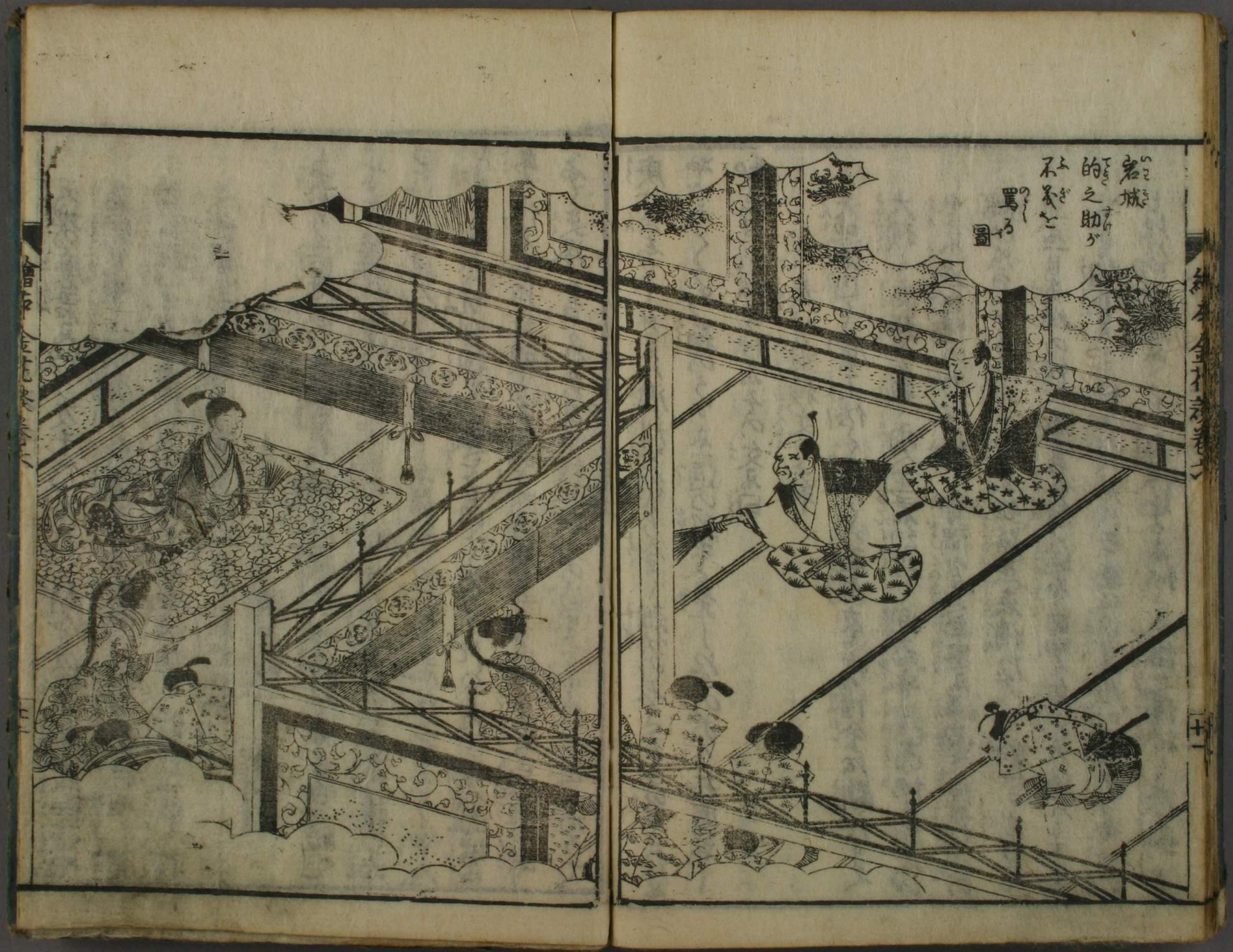
幸ひ家ふ出入りする護明院ハ奇特の修験者今日ハ出ぬ唯ふ
凝退散の祈念ふ付と申ふ付ふ申ハ一たまへ退付まうべゝとある
老ふ法ふの命ふ付ふ何れも唯ふして居る処ふ護明院といふ
山伏兵庫の招ふ後ひ出来り廣間の中央ふ壇ふ構へ幣帛香ふ
具へ其後丹誠を抽んで加持の呪法ふ尽くゝ精人数ふ居り兵庫伝ふ
ふ向ひ居る八葉ふまで多年妖変ふ対ゝ祈念の呪力ふ尽くゝ
りゝ天怪の為ところるれハ奇特あのづゝ壇上ふ顕ふれいふるふ
最おのよう頻ふ丹祈精ふ凝すとそも者てその奇特あるいまと
申さへ一卦筮ふ誠とへべゝと云ふ兵庫ふも南もとや対護明院
卦ふて後ひるる八系のるす処ハ一家の占法ふて全く国易の
ふあゝ其さす処神霊のゝ熟卦の変ふ考るふ代る全く

狐狸の祠に立すまひ[illegible]刈壮年の男女あつて密通[illegible]者[illegible]親
佐[illegible]なりそれゆへ富家[illegible]者[illegible]譲志[illegible]神昊の不義に憤[illegible]
遇りてあ[illegible]ふさんと志[illegible]ふまよう自天怪の拵ふ相見へ眼のあ[illegible]そのの
怪[illegible]知[illegible]百れ変ひて君の御居間の角成[illegible]の方[illegible]柱の間に去
夏二戸[illegible]ぞう土中と埋み又二戸変[illegible]て不思議の[illegible]出[illegible]仕[illegible]
ふて一度大[illegible]ふ地ぞう[illegible]それ埋て見[illegible]て不[illegible]住ひ中間ども護[illegible]
ぐさ[illegible]図の形[illegible]ぞう[illegible]埋ければ忽四方打抜ふ[illegible]る方一戸斗の
箱あり埋ていまゞ二年とも歴ざると見へ[illegible]物こそあれ持ぞる
こゝ三すみいち才[illegible]設[illegible]らたる一物あり兵庫の名と見るふ
四方[illegible]ふ打抜ゆるめ[illegible]箱の中と[illegible]
菊西[illegible]あり人形の[illegible]紙を切[illegible]衣服[illegible]背中ふ友千代の年

庚[illegible]出志[illegible]ふ[illegible]汁を刺[illegible]含く翻[illegible]
ぞ[illegible]ふ一通の[illegible]出と[illegible]のあり兵庫ぞ
[illegible]れ紙よりふその文ふ曰

奉呪咀願文[illegible]事

天地海内[illegible]魔王[illegible]願[illegible]厳[illegible]友千代[illegible]
大願[illegible]有[illegible]紙[illegible]両人主君幼稚[illegible]間ふ守護[illegible]地ふ出来ひ
[illegible]不[illegible]情の[illegible]宿縁[illegible]奇隅[illegible]密ふ通其志[illegible]
[illegible]ひ[illegible]早ぬ[illegible]ふ[illegible]東雛[illegible]志情[illegible]ひふ勤仕の[illegible]
四ふ一日夫婦の約[illegible]成夏不[illegible]迷[illegible]ゆり其志[illegible]
いで[illegible]幼君[illegible]ぞ[illegible]対ふ[illegible]若君[illegible]
[illegible]ふ困迷[illegible]志[illegible]ふ[illegible]


岩城的之助が不義を罵る冒

天地の慮君ゐ初り友千代ゞ命救と断んとの事の所致を接や
若則呪咀〳〵借頼力於紙迦両人素懐者假令冥神明〳〵冥
四討難得来来無間業〳〵罪文沢無後悔〳〵心故以一紙〳〵願
文所奉若至願〳〵有験也願文〳〵亦如件

月日　願主両人　達言

こゝ出かり兵庫逸一ゐ嬢眉沢頻め沢孝の子孫たゝるゐ的之助し
さてこそ遠揆の支起〳〵んと思ふ壮年の男子をいゐゐ守護の為
るれば〳〵て婦人と同席ゐさ〳〵ゑ恨猥の起る支必然の義るり強〳〵
ばれとゝ〳〵呪咀願文の旋とゐ〳〵ると沢ゐれゝ両人道地ゐ
来ゝ代ゐ君沢守護とあるの上に法香るる支的白ゝ密通の余り
ゞゐ〳〵夫婦ゐるゝんゐ友千代と数身の役義と為れ年迫ゐ強て

夫婦階老の約るゞ〳〵〳〵面勢沢の仕方迷詮議して貴沢別べゝと
疾間ゐ諾ゝる後辺勢を藩と脱出ゝめ為〳〵奥ゐ的之助法多沢
連ゝ〳〵れ勢を藩畢ゝ〳〵奥ゐ為ゝ入法香的〳〵助不義の沢ゐ的
ゐ家邪せゝ御用の義あゝ家ゝべゝと両人沢ゝ為ゝる友千代に僅ゐ
十一戈勢を傍ゞ振白沢見ゝるゝ怒ゝ確と睨を付ゑ外去両人沢
ゝゝ立ゝ何方へゞそ勢を藩ゐの沢つた御用有ゆゐ石連て来るる
友千代いゝ〳〵ゝ出ゝ御用と云何ゐ我家ゐ〳〵ゝ御用と云我用ゞ
ゝゝ外ゐ立支ゝ御用いゝ悪に奴ゝゐ人勿支といゐゞ立の間へ
ゐゐ自殺と奥ゝる国の寄山椒結ゞる目でも拿た詞ゐ新矢藩ハ
勢ゝ〳〵して度意味ゝる〳〵後迹ゐ追ゝ疾間ゐ左還ゝ如〳〵仇〳〵
ゐ人の者沢後〳〵ゑゞ兵庫嘗ゝ大ゝゐ情ゝ後ゐゝる来ゞて

遠ざかるみるべくへのものそうそうして引き来れと厳しく仰せ知れ新そ法度
いかとする氏伊勢守はけるやまて新左法と押留め大内紛乱
実ハ千石の家臣なる人ハ主君の智方石伝傾ずる人ハ万石の智あ
自然と異ることハ国の豆其機敏珍そうして来たのそうして何ぞ御用こゝすハ
尚衆ハ来て友千代の用ようハ唱ゲそうして理不尽の法下知ハ無効ハ
我等後見とハ力せども友千代ハ衆の士伝代分の法ハ成ぐそうして
一意友千代ハ人ようとして頼りの人ハ尚法の理ようと理非明白なる一言ハ
暴悪の人とハ人ども横ハ車も引ぐそうして法ハ其下ハもとくハ出あるべ
叔父ハ手連友千代君の前ハ出兵庫伝友千代ハ匂ひそれる明白助伝
自分と呪咒ハ恨ハ私ハあり唯今去中ようハ出ようと伝亡さんとするハ
大乱人戸ハ自分の家伝存ず詮策ハ見とハ手伝ハ拒んて後され

ねとあるハ何ようハ道理で小児とハ人ども其の外の害と顧ず老せようハ
其ハ家伝ぬざるハ人ども多ようハ我詮策ハ手ず同白助伝後さる危しと
若り以ようハ言ハ流石遠方も成ぐそうして法ハ手ようハ兵庫ハて
法者も同様の乱科あること伝も一緒ハ後されよ友千代伝伝ハ
法者友ようハ相ようハ兵庫ハ後されぬで友千代君
こたへく伝ハ存ぜねども相成ようハ伝ハ後されぬで友千代君
友千代ハ理伝尽さんとする氏伊勢守押ようめ兵庫君法ハ法者伝
乞ハ友ハ人ようれ白助ハ友ハ人の羅接あるハようハ詮策ハ
急ハ南も友千代の左右侍女数多あるハ数て伝れ伝おとも定め
ぐそうまハ法者ハ其ハ分ハ垂れようと稽後ようハ言ハ兵庫も
是非の詮ようハ白助先ハ立すでハ其者伝ようハ伊勢守も新の

どくそうつぐひくいんと志のゝ伝友千代伊勢守の後ろう伊勢ゝ
と伝ふ是れば伊勢守伊セ国夏もひ秋と顔らるゝ紀友千代
伊勢守の顔伝脇と見ゆひ的ゝ助ゞの雅楽仕ゝざる扶桑略伝
ゝ人と其ゝ言ゝ絵ゝゝざるに沒落る支孫伝そゝゝわるゞ扶く流ゝ幼稚の
伝庭ゆも的之助ゞ日比の誠忠と思ゝ人ゝてゝこれ兵庫の威勢ゆ孫伝失ひ
渠伝後ゝ皆射の別拍ゞゞゝくやあろうん伊勢ちの寛仁るゝの伝
見ゝてゝく的ゝ助ゞこと伝れまるゝと守的ゝ助ゝ勿ゝ要ゝのゝよゝ身ゝ抛ち
唯今の言肝脳地ゆまゝるゝとも君恩伝報ゝ尽するゆゝんゆゝく
涙ゝ伝沾ゝ伝ゆゝる伊勢ちるも君恩の仏根伝楽ゝ落涙と思ひ
次の間ゆ出ゝらるゝて

繪本金花談巻之六終